

富士山南麓でのカエントケ発生

沢田 明宏

昨年、私が勤務している富士山1.5合目(標高1,100m)の富士山「まなびの森」で猛毒のカエントケを見つけました。

最近、カシノナガキクイムシ(通称カシナガ)によるブナ科の樹木、クヌギやコナラ、カシ類の「ナラ枯れ」が日本各地でおきています。

私はナラ枯れの専門家ではないので詳しくは述べませんが、カシナガが穿孔しながら樹体内に持ち込むラファエリア菌(通称ナラ菌)が繁殖してその周囲の細胞が死に道管を塞ぐことでナラ枯れが起きます。樹体内で繁殖したナラ菌はカシナガのエサとなっており、カシナガとナラ菌は密接な共生関係にあります。

2020年、富士山周辺の落葉広葉樹林帯でミズナラなどが多数ナラ枯れの被害に遭いました。

1年経った昨年夏「まなびの森」の中で、その立ち枯れたミズナラの根元に見慣れない毒々しい朱色をした宝石サンゴ状のキノコを発見しました。私は初対面でしたが、見た瞬間に「カエントケ」だとわかり、近寄ることさえ躊躇しました。触るだけでも皮膚が爛れる恐れがある、言わば最凶の猛毒キノコとして名前を馳せているだけに、写真を撮る際もキノコに触れないように細心の注意を払いました。

あとで、吹春先生にお聞きしたら、キノコの汁が皮膚につかなければかぶれることはない、と聞き少し安心しましたが。

「まなびの森」では10本ほどのミズナラがナラ枯れを起こして立ち枯れました。その内の5ヶ所でカエントケが発生していました(図1)。

他の場所でもミズナラやクヌギなどのナラ枯れを起こしたらしい場所でカエントケが見

られました。

ほとんどのカエントケは根元すぐのところから発生していますが、中には50~60cm離れたところにポツンと生えている場合もありました。どうも、その下にミズナラの根があったようです。



図1 立ち枯れたミズナラの根元に発生したカエントケ



図2 発生を確認してから約1週間後、カエントケの表面に白っぽくカビが生えたように老菌化する

カエントケは発生から1週間ほどで子実体の色鮮やかさがなくなり、表面にカビのようなものが発生して老菌となります(図2)。発生から2~3週間で萎れて消滅しますが、条件があれば再び同じ根元から発生したこともあります。

カエントケはその色鮮やかさに惹かれて触りたくなる人が出ないとも限らないため、「注意喚起」の掲示をして、被害が起きないようにしています(図3)。また、地元の地方新聞に情報提供して、記事にもしてもらいました。



図3 「注意喚起」のための掲示

「まなびの森」より標高が高い富士山自然休養林ハイキングコース沿い(標高1,400~1,500m)でもミズナラのナラ枯れ被害は起きているため、県の関係部署にも情報提供しました。広く周知することが肝要かと考えます。ただ、これから毎年のように、枯れたミズナラなどの根元にカエントケが発生するかと思うと、あまり良い心持になれません。

それでも悪いことばかりではありません。ポジティブにとらえれば、ミズナラなどの倒木には危険なカエントケばかりではなく、美味しい食菌ももちろん発生します。オレンジ色が人目を惹く色鮮やかなマスタケ(図4)の他に、皆さんよくご存じのシイタケ(図5)や最近栽培物が店頭に並んでいるヤマブシタケ(図6)などが発生して、楽しませてくれています。



図4 マスタケ



図5 シイタケ



図6 ヤマブシタケ